

このひとのキャリアを聞きたい！ 「一步高いところを目指すためのアドバイス」

キャリア支援委員会

伊藤明子¹ 岸部麻里² 塩原哲夫³ 矢上晶子⁴ 青山裕美⁵ 市原麻子⁶
高山かおる⁷ 多田弥生⁸ 東 裕子⁹ 松村由美¹⁰ 峠岡里沙¹¹ 秀 道広¹²

要旨

2017年6月に仙台で開催された第116回日本皮膚科学会総会において、キャリア支援委員会は教育講演「一步高いところを目指すためのアドバイス」を企画した。DiHS及び食物アレルギーの分野で活躍する講師2名のキャリア形成の過程を聴講し、未来を担う若い皮膚科医にすべきアドバイスについて、会場の参加者全員が参加してパネルディスカッション形式で討議した。

1. はじめに

2014年6月より旧「皮膚科の女性医師を考える会」は日本皮膚科学会「キャリア支援委員会」として活動している。本委員会の目標は、男女を問わず、1) 皮膚科学における指導的役割を担う人材の育成、2) 皮膚科勤務医の就労の継続および再開の支援、3) 皮膚科医の使命感と公共心の涵養、である。2016年の委員会報告「皮膚科医に必要な使命感と公共心について考える」¹⁾で紹介したように、本委員会では、1) 総会および各支部総会にあわせて開催される委員会主催の企画、2) 皮膚科リーダー養成ワークショップ、3) 皮膚科サマースクールを企画している。本報告では、2017年6月に仙台で開催された第116回皮膚科学会総会にて、昨年度に引き続き「この人のキャリアを聞きたい！」というタイトルで教育講演を開催した内容について報告する。この企画では、すでにキャリアを確立した皮膚科

医と、これからキャリア形成を目指す皮膚科医に比較的近い世代で、現在サブスペシャリティを確立しつつある、あるいは確立して現在、専門分野で活躍している皮膚科医がどのようにして専門分野を選択し、その分野で活動しているのかについて講演を依頼してきた。本委員会会議で皮膚科医のキャリア形成の仕方について討議した際に、「男性医師は高い目標を掲げ、山の頂上を目指して登っていく。女性医師は、結婚や出産、子育て、介護などライフイベントに伴う障壁にぶつかりながら皮膚科医としての人生を歩み、気がつけば、あちこちの岩にぶつかりながら川下りの人生を送ってきてしまったと振り返る人が多いのではないか」という意見が出た。男性医師と女性医師のキャリア形成の違いがここにあるのではないかと。しかし、女性に限らず、確固とした目標を持たずに目の前の課題に対処しながら人生を歩んできたという皮膚科医は決して少なくないだろう。一人一人の患者に真摯に向き合うことは、その皮膚科医のキャリア形成にとって大きな意味があることは間違いない。しかし、経験を積み、それまでの仕事を発展させて、さらに社会貢献をしたいと思ったとき、仕事を続ける環境やポジションがなければ、目標の達成が困難な状況に陥りかねない。若いうちから未来の自分の姿を想像して研鑽を積んできた皮膚科医はどの程度いるのだろうか。男女に関係なく、将来後悔しないキャリア形成をするために、若い医師には、早くから将来の目標を掲げることを意識するようにアドバイスすればよいのでないか？ ただ

- 1) ながたクリニック、新潟大学・委員
- 2) 旭川医科大学・委員
- 3) 杏林大学
- 4) 藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院
- 5) 川崎医科大学総合医療センター・副委員長
- 6) 熊本大学・委員
- 7) 済生会川口総合病院・委員
- 8) 帝京大学・委員
- 9) 鹿児島大学・委員
- 10) 京都大学・委員
- 11) 京都府立医科大学・委員
- 12) 広島大学・委員長

し、あまりに高い目標の実現は多くの皮膚科医にとって苦しく、難しいことが予測される。まず「一歩高いところ」を目指すことは可能なのではないかとキャリア支援委員会では考えた。そこで今年度のテーマを「一歩高いところを目指すためのアドバイス」とし、疾患としては、薬剤アレルギーおよび食物アレルギーを学ぶ機会とした。本年度はキャリア形成を確立したロールモデルとして杏林大学名誉教授の塩原哲夫先生に「DiHS 物語～何故 DiHS は見つかったのか？」というタイトルで講演を依頼した。塩原先生は女性医師のキャリアを考えるべく「皮膚科の女性医師を考える会」を発足し、皮膚科医のキャリアについて貢献されてきた。また現在キャリア形成をしつつある女性皮膚科医として、藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院総合アレルギー科の教授に就任された矢上晶子先生には「ブリックテストで食物アレルギーの謎を解き明かす」というタイトルでご講演いただいた。続いて本委員会の青山裕美副委員長が本企画のテーマ「一歩高いところを目指すためのアドバイス」が選択された理由を聴講者に解説し、その後、本テーマについて、演者、聴講者によるパネルディスカッションを行った。本稿では講演と討議の内容、聴講者のアンケート結果を紹介する。

2. 講演

1) 「DiHS 物語～何故 DiHS は見つかったのか？」 塩原 哲夫 (杏林大学)

これは DiHS (薬剤性過敏症候群) という一つの病態解明に懸けた人々の小さな小さな物語である。

それは今から 23 年前、ある病院に来院した患者が奇妙な経過を繰り返し、不幸な転帰をとった所から始まる。同じ病院には同様な患者が次々に来院し、奇妙な経過は繰り返された。その謎を解き明かすべく、愛媛大と杏林大が立ち上がった。面白いことに、両者は殆ど相手の動向を良く知らないまま、ほぼ同時に潜伏 HHV-6 の再活性化が DiHS の奇妙な経過の原因であり、それは殆どの DiHS 患者に見られる現象である事を突き止めたのである。我々の教室で、その発見に寄与したのは当時慶應義塾大学から赴任したばかりの鈴木洋介君であった。彼は二度の採血で HHV-6IgG 抗体の上昇を認めなかった DiHS 患者に対し、二度目の採血の一週間後という絶妙なタイミングで三度目の採血を敢行し、HHV-6IgG 抗体の著明な上昇を確認したの

である。二度の採血の結果に失望していた我々にとって、この絶妙なタイミングでの採血は、まさに干天に慈雨であった。彼はその後、阪大山西教授の下に短期間留学し、HHV-6 が全血だけでなく皮膚病変部にも存在することを証明した。同じ頃、愛媛大学では橋本公二先生と藤山先生が同様の所見を捉えていた。面白いことに、両者ともこの結果をまず N Engl J Med に投稿したが、ともに何回かのやり取りの後 reject となった。この段階でも両者は全く別個に進めていたが、またしても次の投稿先に同じ Arch Dermatol を選ぶことになったのである。しかし似た内容で、著者の一部(阪大山西教授ら)が共通していることもあり、Arch Dermatol 編集部は両者が同じような内容を、別の論文として投稿してきたと勘違いしてしまった。その結果、編集部はお互いの論文とそれに対する reviewer のコメントを相手方に送りつけ、両者を一つの論文とするように迫るといふ大失態をやらしたのである。これに対して、喧嘩するより、編集部のこの決定的なミスに逆を突いて、我々の方から逆に“これは同じ号に載せるべき”と強く迫ったのである。この作戦は功を奏し、両者は目度度く同一号に載ることになった。我々と愛媛大のこの競争は、一歩間違えば両者の反目になりかねない出来事であったが、我々はこの事件(?)を契機に、友情の絆をいっそう強くしていったのである。

この友情は、その後の厚労省研究班の設立、診断基準や治療指針の策定、国際的な認知へ向けた共同戦線へと繋がっていく。しかし、このような協力体制があっても、当初我々の発表はかなりのバッシングを受けることになった。何故、薬疹にウイルスの検査をしなければならないのか、中毒疹という病名があるのに何故 DiHS 等という診断名をつけなければならないのか、等々。このような批判は学外だけでなく、教室内でも起こった。逆に言えば、教室内の反発の方が激しかったかもしれない。しかし、教室内にも狩野葉子先生を初めとする理解者が次々に現れ、彼女らが多くのデータを出してくれたお陰で DiHS の病態は次第に明らかになり、一つの疾患概念としての DiHS は誰の目にも明らかなものになっていった。

今つくづく思うのは、この難事業を可能にしたのは、目標を一つにして多くの人の力を結集した取り組みのあり方に他ならず、誰か一人でも欠けていればこの事業は為し得なかったということである。それはまさに不可能を可能にする我が国ならではのやりかたであっ

たように思う。今この物語に登場する人々は、一人また一人と表舞台から立ち去ろうとしている。我々はまさに同じ夢の時間を生きたのかもしれない。

2) 「ブリックテストで食物アレルギーの謎を解き明かす」

矢上 晶子

(藤田保健衛生大学坂分種報徳會病院
総合アレルギー科)

近年、皮膚科には、花粉—食物アレルギー症候群、小麦依存性運動誘発性アナフィラキシー、ラテックス—フルーツ症候群など、多様な病態の食物アレルギー患者が受診するようになった。特に最近では、加水分解コムギ含有石鹸の使用者に生じた経口小麦アレルギーを中心に、化粧品中のコチニール色素や豆乳(大豆成分)が原因となった食物アレルギーなど、経皮・経粘膜感作による食物アレルギーが注目されている。

さらに、寿司や和菓子職人が魚類や豆類にアレルギーを獲得した症例や、ビアレストランで就業している際にビールにより手指から感作された症例などが後を絶たない。講演では、これらの食物アレルギーに対し、ブリックテストをどのように活用して確定診断に導き、適切な生活指導を行うかについて述べた。同時に、私自身がブリックテストを始めるきっかけとなったラテックスアレルギーや、食物アレルギーの深さを学んだラテックフルーツ症候群など、様々な即時型アレルギーを経験する中でどのように“ブリックテスト”という手技を確立してきたかを述べた。

研修医だった20年前には手探りの状態だったブリックテストも、その手技や抗原の選択、調製などが確立されつつあり、また、学会によるハンズオンセミナーなども数多く開催され、より多くの医療施設で行われるようになってきている。一方で、準備やマンパワー、安全性の確保が必要な検査であるため、未だにどの医療施設でも行える検査ではない。また、近年の経皮・経粘膜感作食物アレルギーの場合、症状を誘発した食材にのみ注目しては原因を解明することはできず、“その症状を誘発している原因は何か?”という洞察力を持たなければ診断に至らない。特に、それらの原因物質は、加水分解コムギやコチニールであることもあり、試薬の入手や調整は簡単ではない。今後は、これらの現状を鑑み、食物だけでなく、薬剤、その他の物質の標準化された試薬(抗原)の作製に取り組み、どの施設でも精度が高く、安全に行えるブリッ

クテスト法の確立に取り組んで行きたいと考えている。
最後に

講演を振り返り、今回、発表の機会を与えていただき、皮膚科医として歩んできた20年を振り返らせていただいたことに深く感謝しています。様々な食物アレルギーを経験し、多くの時間を費やし学ぶことができました。と同時に、私なりに山あり谷ありの時を過ごし、学内外を問わず、本学会の多くの先生方に助けていただいていた。これからも縦や横のネットワークを大切に、少しでも恩返しができるよう努めたいと思います。ありがとうございました。

3) 「一歩高いところを目指すためには何をすれば良いのか？」

青山 裕美

(川崎医科大学総合医療センター、
キャリア支援委員)

スーパースターの経験談は、凡人のキャリア支援に果たして役に立つのか。

キャリア支援委員会の企画に、より多くの参加者を集客するためには、業績はもちろんであるが、「あの人の話なら是非聞いてみたいものだ」と思わせる先生にお願いするのが会の成功の秘訣である。しかし、すばらしい先生方の経験談は、素晴らし過ぎて役に立たないと思われてはキャリア支援にならないので、今回は塩原先生と矢上先生の経験談を拝聴して、さらに参加者の皆様に役立つ何かを見つけるために、意見交換の時間を設けた。

最初からとても高いところを目指すのは大変そうであり、出来そうになく感じられる。私達は、そんな高い所を目指せといっているわけではなく、ただ一歩高い所を目指してみてもどうか。そして、そのためには、どうしたら良いか、考えてみよう、という提案である。

具体的には私が今回、提案した内容は以下のとおりである。

1. 一歩高い所を目指すと決めたら、計画を実行しよう。

いつかやろうとか、どうしたらできるのかばかり考えてないで、思いつくことを「今日」やってみることがとても重要。

2. 一歩高いところを目指している人達との出会いを大切にす。

やっているうちに、師匠、先輩や同志が見つかり、メンターやロールモデルとなるだろう。さらに、教え

写真 総合討議の様子



る後輩が見つかり、互いに励まし励まされ切磋琢磨できるであろう。

3. 気持ちのよい生き方をしよう。

3. 総合討議

3つの講演が終了した後、パネルディスカッション形式で会場からの質問に演者が回答する機会を設けた。討論された内容の一部をQ&A方式で以下に示す。

Q:「先生のような凄い人を目指せと言われても無理、かえってハードルが上がって困る」と言われる。どうしたら良いか？

A:「自分では無理だ」、「この人にはできない」、などと考えないようにした方がいい。若い医師は、自分の限界を自分で決めてはいけない。たとえ不遇な環境におかれても、騙されたと思うのではなく、これで良かったとポジティブに考えることが大事である。逆に指導する立場の者は、若い人達の能力に限界を設けなくて接するようにしてほしい。

Q:(矢上先生に)講演のなかで、「子育てにおいて子供には謝らない」というお話がありました。患者さんに対してはどうされていますか？

A:もちろん、患者さんには謝ります(笑)。「お待たせしてすみませんでした」など、外来の度に謝っています。しかし、子供には安易には謝らないようにしています。子供が小さい頃、小児科の先生に教えていただいたのですが、お母さんが「ごめんね」と言うと、子供はお母さんの「ごめんね」だけを記憶して成長するのだそうです。例えば、子供を保育園に迎えに行く時、「遅くなってごめんね」と言うと、「お母さんが仕事で忙しかったから、子供の頃、自分はさみしい時間を過ごした」という気持ちを持ち続けることになるので、「〇〇ちゃんに会いたかったから、お母さんはすご

く急いで迎えに来たんだよ」と前向きな言葉をかけてあげる。仕事をしていて迎えが遅くなるのは仕方ないことなので、「〇〇ちゃんに会いたかった、さあ、夜は一緒に楽しく過ごそうね!」というような言葉や行動をとることが大切だと思います。しかしながら、まだ子育ての途中なので、私の子育ての結果がでるのはまだまだ先のことになります。仕事と同様、子育ても試行錯誤しながら一日一日の積み重ねですが、できるだけ楽しもうと心がけています。

Q:(塩原先生の素晴らしいプレゼンテーションに)どのようにしたら先生のようなプレゼンができるようになるか？

A:自分は上手ではない。だから、たくさん練習して、努力して勉強しています。

そのほか、塩原先生からは「自分には才能がない、素質がない、と言って終わらせるのではなく、より一層努力すること、絶え間なく研鑽することが重要である」という意見があった。

4. 来場者アンケートの集計結果

本企画では、次回の企画につなげるために、毎回、聴講者に聴講後アンケートを実施している(表1)。本年度は、聴講者およそ100名のうち、24名よりアンケート回答を得た。卒後年数は、21~30年が最も多く(図1)、女性が半数以上を占めた(図2)。大学または大学以外の病院に勤務し(図3)、専門医の資格を有して(図4)指導的立場にいる参加者が多かった(図5)。参加したきっかけとその理由について、多くの参加者が講演内容や演者に興味を持って来場していたと回答した(図6, 7)。全体を通しての感想は、“大変良かった”または“良かった”との回答が8割以上と好評だった(図8)。改善すべき点として一般病院や基幹病院の勤務医の講演を望む声も寄せられた。アンケートの自由記載欄に寄せられた回答を以下紹介する。

良かった点(自由記載)

- ① DiHS について勉強になった。
- ② 今後の診療を行っていくうえでの考え方が学べた。
- ③ 講師のキャリアがどのようにして築かれてきたのかを知ることができた。
- ④ 最後の討論、質問の時間がより現実に近い内容で良かった。
- ⑤ 著名な先生の話が聞ける。
- ⑥ 時間にゆとりがあり、十分に話が聞けて良かった。
- ⑦ タイプの異なる講師であり、それぞれの話から得

表 1 聴講者アンケート

- 問 1. 卒後年数
 問 2. 性別
 問 3. 勤務先
 問 4. 専門医
 問 5. 現在、指導的立場についていますか？
 問 6. 今回の企画に参加したきっかけは何ですか？
 問 7. この企画に参加しようと思った理由は何ですか？（複数選択可）
 問 8. 全体をとおしての感想はいかがでしたか？
 問 9. この企画の良かった点や改善した方がよい点など、具体的に記入してください。
 問 10. 今後取り上げてほしい企画を記入してください。

図 1 卒後年数

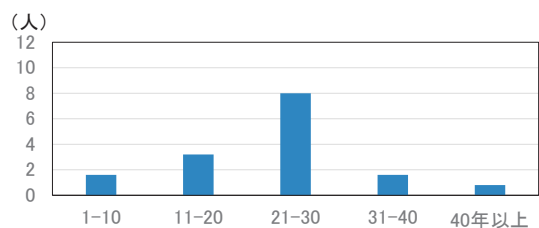


図 5 現在、指導的立場についていますか？（数字は人数）

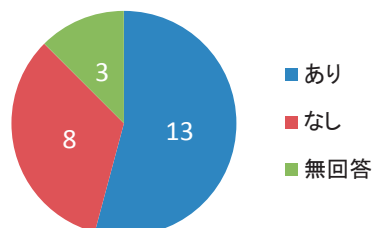


図 2 性別（数字は人数）

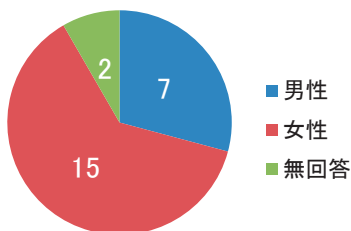


図 6 今回の企画に参加したきっかけは何ですか？（数字は人数）

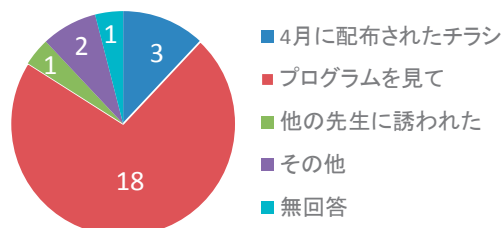


図 3 勤務先（数字は人数）

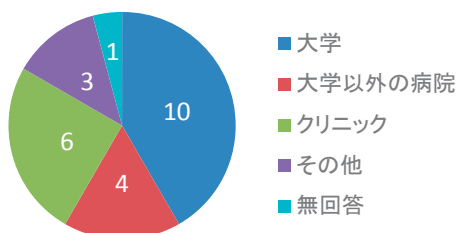


図 7 この企画に参加しようと思った理由は何ですか？（複数選択可）

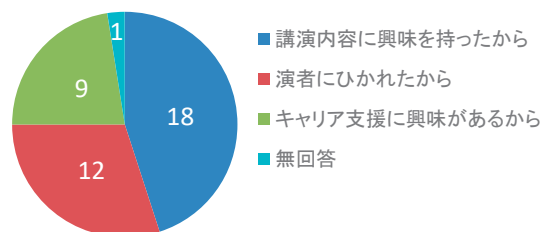


図 4 専門医の人数（数字は人数）

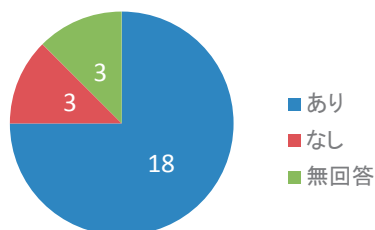
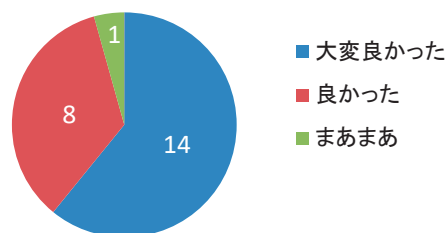


図 8 全体をとおしての感想はいかがでしたか？（数字は人数）



るものがあった。

⑧経験から疾患（DiHS）の本質を解き明かしていく過程が聞けたので、疾患に対する理解が深まった。

⑨率直な体験談が聞けて良かった。自分の努力不足を痛感した。

改善すべき点（自由記載）

①大学所属ではなく基幹病院の皮膚科医のキャリアについても聞きたい。

②産官学の話が聞きたい。

③退官した皮膚科医の話が聞きたい。

5. 最後に

順調にキャリアを確立した、またはキャリア形成しつつあると思われる皮膚科医にとっても、たくさんのつらく苦しい経験があるであろう。しかし、本人の地道な努力と根気、そして周囲の人の協力や良好な人間関係、仲間の存在により、様々な困難を乗り越えてきたことを3名の講演を聞き改めて知る機会となった。会の最後に塩原哲夫先生から、「以前は女性医師がロールモデルを身近に見出すことが困難な環境にあった。その理由は、男性医師には情報交換の場があるが、女

性医師にはそうした場がなかったためだと思われる。

女性のキャリアを向上させるためには、情報を交換できる「場」を設けることが必要だと考え、「皮膚科の女性医師を考える会」を立ち上げた。キャリア支援委員会主催の会などを利用して、お手本としたい指導者、共感できる同志を見つけてネットワークを広げると良い。」というアドバイスがあった。矢上晶子先生からは、子育てをしながら仕事を継続し、かつキャリア形成をするうえでの覚悟と、厳しくも愛情あふれる子育ての流儀を教えていただいた。

本教育講演は、キャリア発展途上の若手医師向けの講演として企画されたが、指導的立場に立つ中堅医師の関心が高かった。また皮膚科以外の職種の従事者も参加していた。今後もキャリア支援委員会企画教育講演は、未来の皮膚科を担う若い医師と指導的立場にある医師、そして、すべての皮膚科医にとって有意義となる企画を続けていきたい。

文献

- 1) 多田弥生, 伊藤明子, 東 裕子ほか:「皮膚科医に必要な使命感と公共心について考える」, 日皮会誌, 126 (13); 2405-2408, 2016.